

研究ノート

「尊厳」を支える排泄介護のあり方
～学生の「おむつ体験」に関する調査からの一考察～

How to Provide Toileting Assistance while Preserving a
Patient's 'Dignity': Investigating
Student Experiences with 'Diapering'

井上理絵

INOUE Rie

はじめに

「排泄」は、人が生きていくうえで不可欠な生理現象である。その「排泄」行為は、生まれたての時には母親等に全依存しているが、身体的・精神的な成長発達とともに、3歳くらいにはほぼ全員が自立をする。この時期には、「恥ずかしさ」も意識するようになるといわれる。成長するにつれ誰もが望むことは、清潔なトイレで人目に触れず、気持ちよく、身体に不要となったものを出し切り、処理したいということである。

障害や高齢のため、身体面や精神面で生活上に不都合がある状態になっても、羞恥心がなくなるわけではない。生活のどのような場面でも、どのような心身状態であっても、人としての欲求を理解し、その人に合った支援をしていくことが介護には求められる。

そこで、「排泄の介護」を学ぶ者にとっては、「排泄」に関する知識と技術を学びながら、「排泄」が生活の中でどのような意味を持ち、どのように介助する必要があるのかを理解していくことが重要である。

そこで本研究では、「排泄の介護」を教えるに当たっては、はじめに排泄のメカニズムについて理解し、排泄に関わる動作、心理、プライバシー、そして環境整備と福祉用具について学んでいく。その次に、自立に向けた視点と健康管理、他職種との連携について講義を行っていく。その後、実習着を着用したままのおむつ装着体験やトイレ・ポータブルトイレへの移動・移乗、排泄シミュレーションを行っていく。

しかし、演習で排泄の仕組みや手順を理解し実施できても、実際に排泄する場面での「利用者の思い」を理解することはできない。そのため、排泄時の感覚を体験できる「おむつ体験」を取り入れたわけである。

．方法

1．1年生（16期生）：「おむつ体験」レポート

対象者：富山短期大学 福祉学科1年生（16期生） 41名

期 間：2011（平成23）年7月下旬、「排泄の介護」の講義・演習後

レポート提出期限：8月上旬まで

提出者：36名（回収率 87.9%）

実施に際し、学生には

休みの日に半日以上おむつをつけて普通に生活すること

おむつをはいて、布団に横になること

おむつの中で排泄してみることに

上記 が無理だと感じた場合は、決して無理をせず、できなかった思いをレポートにまとめる。

以上4つを提示し、学生の心情への配慮も行いながら課題を与えた。

2．2年生（15期生）：「おむつ体験」アンケート・グループワーク

対象者：富山短期大学2年生（15期生） 56名

実施日時：2011（平成23）年7月28日

実施内容：アンケート調査、アンケートをもとにしたグループワーク
（以下のとおり）

（1）アンケート調査

1）おむつ体験についての感想（自由記述）

2）おむつ体験の課題を出されたときの気持ち（4つより選択）

- ・ぜひ体験してみたい
- ・利用者を理解するために体験したい
- ・利用者を理解するためにはしかたがない
- ・絶対にしたくない

3）おむつ体験後の気持ち（2つより選択）

- ・体験してよかった
- ・体験したくないと思った

（2）グループワーク

1）おむつ体験は実習で役に立ったか

2）おむつ体験から「尊厳を支え自立を目指す」排泄の介護について考える

．結果

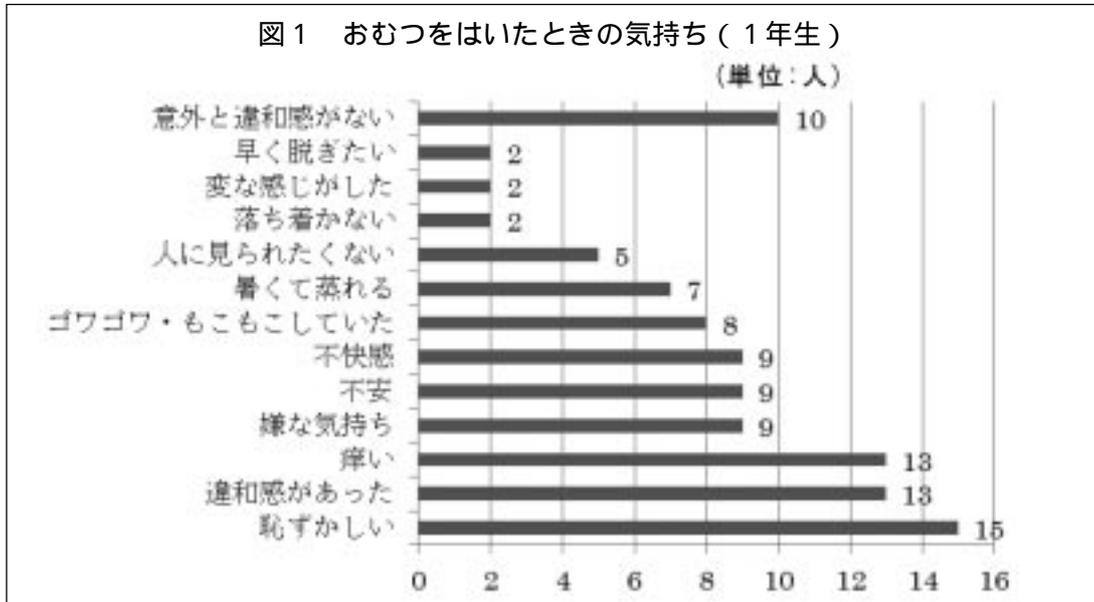
1．1年生の「おむつ体験」レポート

レポートを 「おむつをはくときの気持ち」 「おむつの中で排泄をする時・し

た後の気持ち」の2つの視点から、各レポートに共通することばを整理（キーワード検索）し、まとめた。

（ レポートからのキーワード検索としたため重複あり）

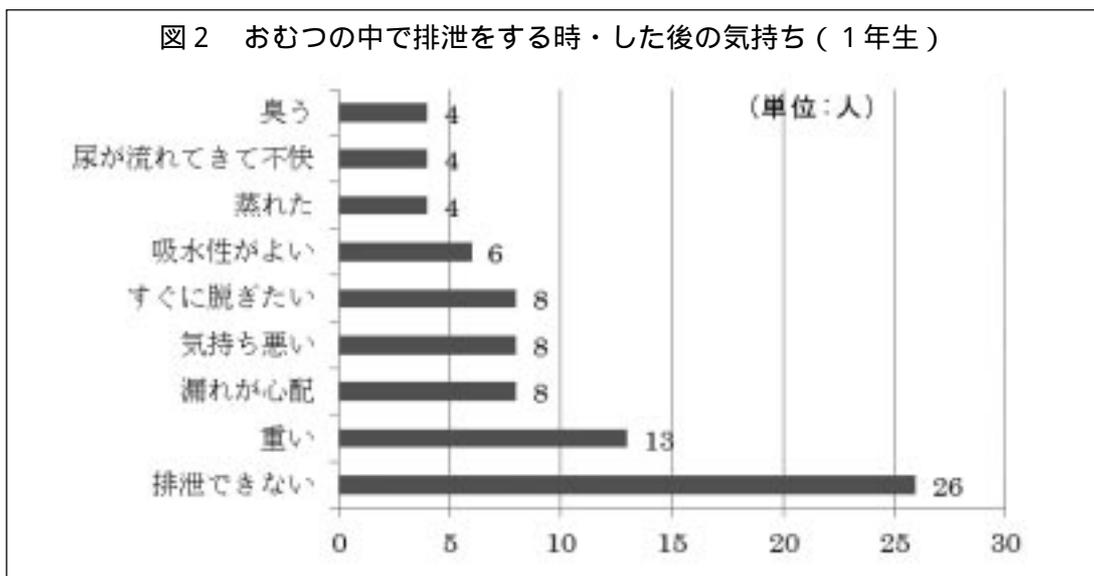
（ 1 ）おむつをはいた時の気持ち



「恥ずかしい」41.7%（15名）が一番多く、「違和感があった」「ゴムのところが痒い」が36.1%（13名）、「嫌な気持ち」「不安」「不快感」が各25.0%（9名）と続いた。また、「ゴワゴワ・もこもこしていた」が22.2%（8名）であり、痒みとともに紙おむつをはいて感じる直接的な皮膚感覚についての感想が目立った。

マイナス面でのイメージが多い中で、「意外と違和感がない」とプラス面でのイメージを述べている学生も27.8%（10名）いた。

（ 2 ）排泄をする時・した後の気持ち



「排泄できない」が72.2% (26人)と最も多かった。

「排泄できない」の中には、「下着を履いたまま排泄するという感覚だったので難しかった」「尿意はあるのに、排尿することができない」「いつもは当たり前に行っていることができなくなった」などの記述があった。

「排泄する時」については、「漏れないか心配」が22.2% (8名)いた。

排泄後には、重量感を訴える「重い」が36% (13名)、「すぐに脱ぎたい」が22.2% (8名)、「尿が流れてきてお尻が不快」「臭う」がそれぞれ11.1% (4名)であった。

今回の課題で、どうしても排泄できなかった学生は1名であった。その学生は、排泄はおむつ内でできなかったが、排泄後の感じを体験したいと思い、「おむつに水を含ませて、はいたみた」と記述している。

なお、1年生のレポートより一部を抜粋して紹介しておく。

「自分の体は、知らないうちにトイレで排泄を行うことを自覚しているようでした」

「人に見られたくない、見せたくない、という部分に触れていかなければならないので、とても慎重になる」

「人の敏感な部分に携わっていくためには、自分が頼られる存在になっていかなければならないと思う」

「相手の気持ちに寄り添い、相手を尊重しながら介護ができるようになりたい」

「こんな体験は今後することはないだろうと考え、布団に入り寝た状態で排尿しようと決めました。その方がより利用者の気持ちに近づくことができると思ったからです。念のため、シーツの上にビニールをひいて、万全な状態にしました。いつもならトイレに駆け込む程度の状態になりましたが、排尿できないのです。30分経過しても、排尿できない。手でお腹を押すと今にも出そうなのに、実際には出ないという状態が続き、気持ちが混乱してきました。そのうち息をするのさえ苦しくなってきました。さらに、自分は一体何をしているのだろうと、惨めで情けないような感情にかられ、涙がこぼれかかっていました。『どうしても出来ないときは、トイレに座ってもいい』という先生の言葉を思い出し、布団から出た状態で上体を起こしなんとか布団内でことを終えました。

排泄した後、利用者の方は、すぐにおむつ交換をしてもらえないわけではなかったもので、暫く横になってみました。トイレではすっきりした感覚が得られるのに、全くすっきりしないどころか、重みが出て生暖かく、蒸れた感じと不快感が時間を経過するにつれ増してきました。すぐに外したい気持ちでいっぱいでした。

今回はおむつを外した後、シャワーをあびましたが、実際に使用されている方は、なかなかシャワーも浴びれないと思います。排泄する行為を他人に委ねなければならなくなったときには、今以上、想像もつかないほどの恥ずかしさ、辛さ、悲しさ、惨め

さなど自分が感じた何十倍もの思いと感情を抱くのではないかと思います」

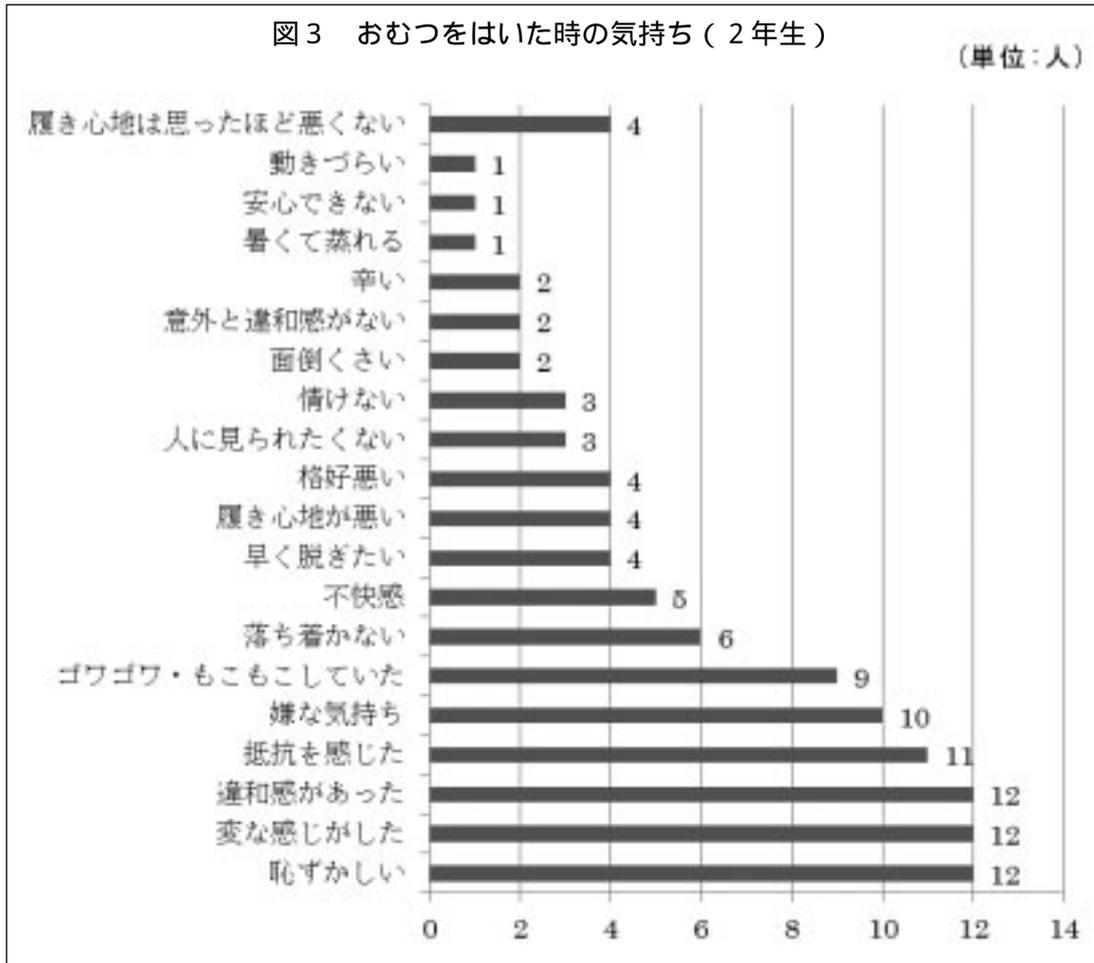
2. 2年生(15期生)の「おむつ体験」アンケート・グループワーク

(1) アンケート調査

1) おむつ体験についての感想

自由記述のため、A「おむつをはいた時の気持ち」B「おむつの中で排泄をする時・した後の気持ち」の二つに視点をおいてキーワードを検索し、まとめた。

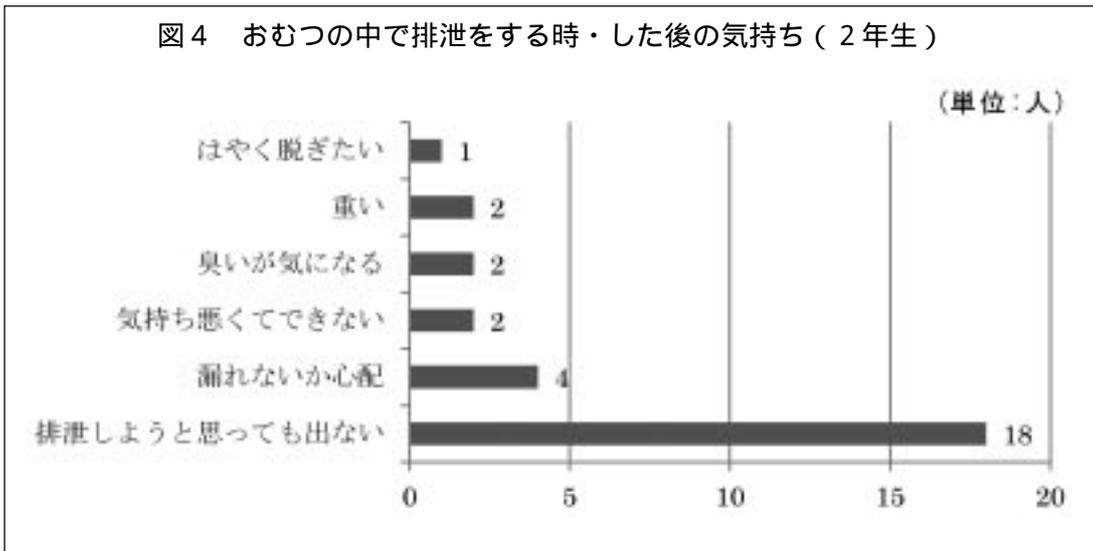
A.「おむつをはいた時の気持ち」



「恥ずかしい」「変な感じがした」「違和感があった」が21.4%(12名)、「抵抗を感じた」が19.6%(11名)、「嫌な気持ち」は17.8%(10名)であった。また、「ゴワゴワ・もこもこしていた」が16.0%(9名)と、紙おむつをはいた際に感じる直接の皮膚感覚について述べていた。

また、他人を意識した意見「格好悪い」7.1%(4名)、「人に見られたくない」5.4%(3名)のほか、「はき心地は思ったほど悪くない」が7.1%(4名)あった。

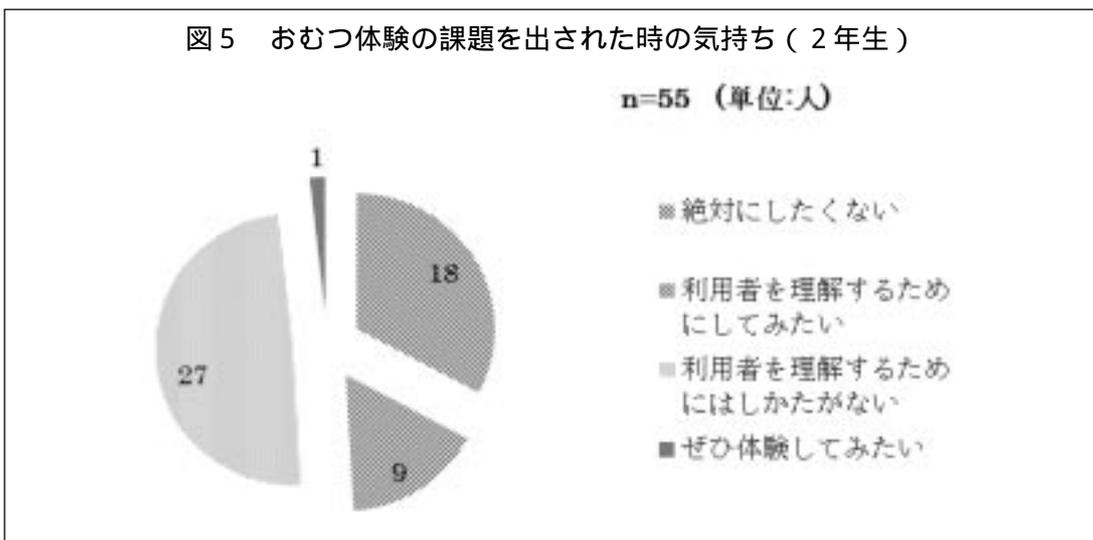
B. おむつの中で排泄をする時・した後の気持ち



「排泄しようと思っても出せない」32.7%（18人）の意見が多かった。その中の意見として、「排泄しようと思っても体に力が入って排泄するまでも時間がかかった」「おむつと分かっていたが出来ない気持ちがあった」「無意識に我慢していた」「おむつに出そうと思って出し切るのは無理」があった。「漏れないか心配」は7.2%（4名）であった。

排泄後では、「臭いが気になる」「重い」が3.6%（2名）で、「早く脱ぎたい」は1.8%（1名）で「使用済みのおむつをずっとつけていることは、精神的にも無理」というものであった。

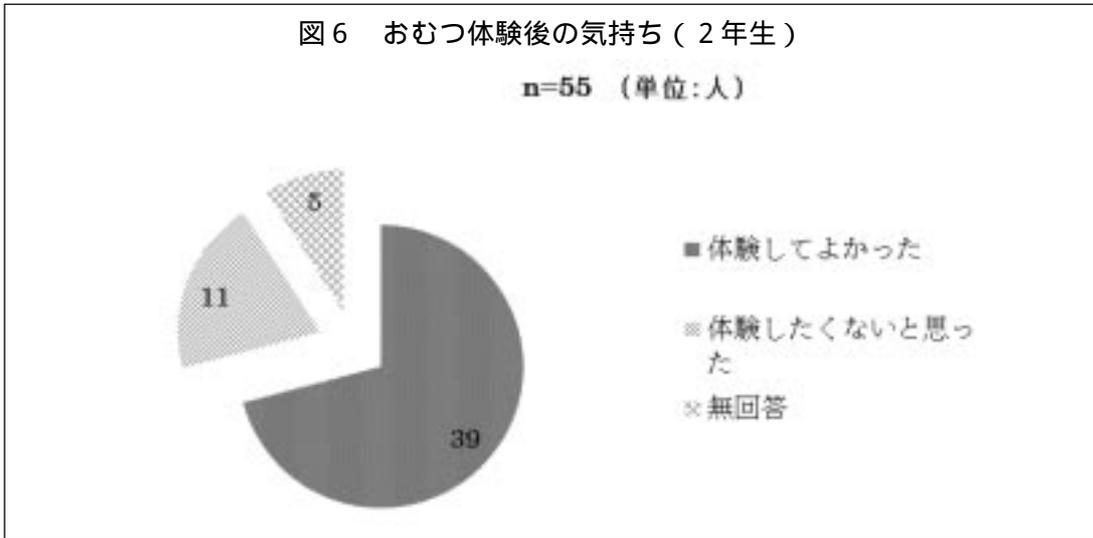
2) おむつ体験の課題を出されたときの気持ち



「利用者を理解するためにはしかたがない」が48.2%（27名）で最も多く、次いで「絶対にしたくない」32.1%（18名）、「利用者を理解するためにしてみたい」16.1%

(9名)であり、1名の学生が「ぜひ体験してみたい」を回答した。

3) おむつ体験後の気持ち

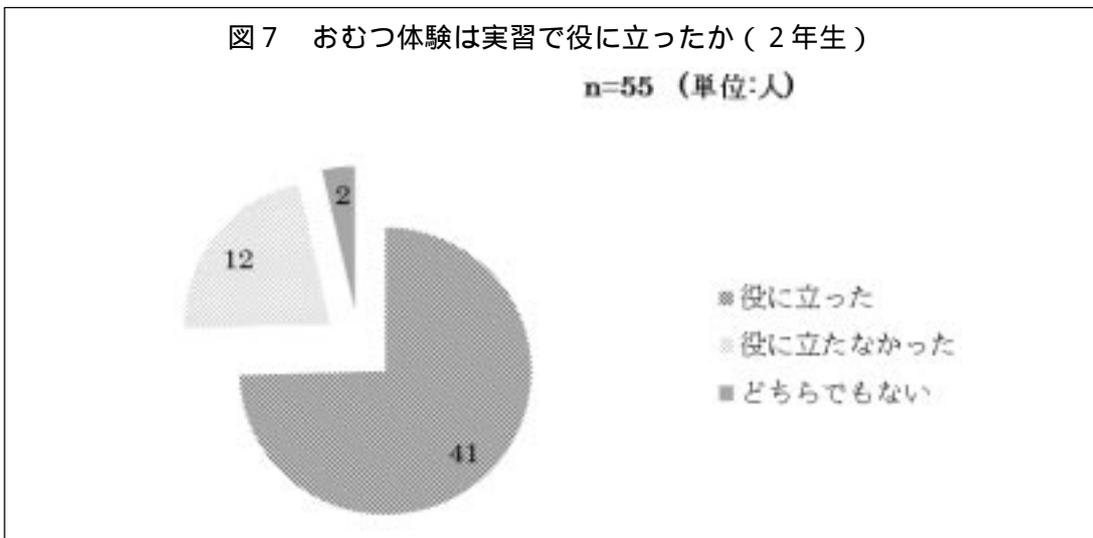


おむつ体験後、「体験してよかった」と答えた学生は69.6%(39名)で、「体験したくないと思った」は20.0%(11名)であった。体験前には、「絶対にしたくない」と答えていた学生も、「体験してよかった」と回答している結果となった。

(2) グループワークの結果について

個別アンケートをもとに、2年生が10グループに分かれ、それぞれの思いを発表した。「おむつ体験は実習で役に立ったか」「おむつ体験から考えた『尊厳と自立』を目指す排泄の介護について考える」の2テーマをグループで話し合い、発表し、意見を共有した。

1) 「おむつ体験は実習で役に立ったか」



「役に立った」は73.2%（41名）、「役に立たなかった」は21.4%（12名）、「どちらでもない」は5.2%（2名）であった。

「役に立った」という意見では、

- ・自分が嫌な気持ちになったから、早く交換してあげたいと思った。
 - ・利用者の気持ち悪いという不快感が理解できた。
 - ・自分が嫌だったので羞恥心に配慮して行うということを考えた。
 - ・なぜおむついじりをしてしまうか、つい気になってしまうからだと分かった。
- などがあった。

「役に立たなかった」という意見では、

- ・感情を理解することは深まったが、介護技術としては役に立たなかった。
 - ・一度だけなので、はいてみて利用者の本当の気持ちに近づけるとは思わない。ただ自己満足みたいなもの。
 - ・実習現場ではおむつ介助に必死で今回の体験のことは頭になかった。
- などがあった。

2) 「おむつ体験から『尊厳を支え自立を目指す』排泄の介護」についての意見交換の結果

グループワークで出た意見を「環境面」「処遇面」に分け、表1にまとめた。

表1 「おむつ体験」から考えた「尊厳を支え自立を目指す」排泄の介護

環境面	したくなった時にすぐに行けるように、トイレの位置を工夫する（施設ではトイレの設置を等間隔にする）
	プライバシーに配慮した環境づくりをする（カーテン・ドアなど）
	常に清潔が保たれた状態のトイレづくりをする
	臭いが無い環境を整える
	トイレが明るいイメージになるよう工夫する
	紙おむつや紙パンツの柄や色を豊富に、素敵なものにする
処遇面	トイレに行きたいと思ったときにトイレに行けるよう支援する
	利用者にとってできる範囲は、自分で行うことが自立ではないか（おむつの人も）
	おむつに頼らず、可能な限りトイレでの排泄ができるように支援する
	介護職員全員が排泄について考え、利用者に対する意識を変える
	女性には女性が介護をし、男性には男性が介護をする（同性介護）
	尿意がなくなったと思われ、おむつをしている人にもトイレ誘導を試してみる
	トイレ誘導の時には、隠語（いい替えの言葉、いわゆる「花をつみにいきましょう」など）を使用する
	便器に座った状態で排泄することが大切
	トイレでは急かさず、利用者のペースで行う
	おむつ交換では、臭わないようにすばやく処理する
相手を思いやる気持ちを忘れず声かけを行う	

他に、「人に見られたくない、人にされたくない介助であることを常に念頭におくことが大切」「利用者自身がおむつを使用していることに関してどのように思っているのかを知ることが大切」という意見があった。

・考察

介護福祉士養成教育では、平成21年度から教育内容の枠組みが「人間と社会」「介護」「こころとからだのしくみ」の3領域に新たに再編され、「その人らしい生活」を支える介護福祉士としての専門的技術・知識を「介護」領域で学ぶこととし、それに必要な周辺知識を「人間と社会」「こころとからだのしくみ」の2つの領域で学ぶことになった。「おむつ体験」の1年生のレポートや2年生のアンケートにおいて、特に「排泄をする時の気持ち」の記述から、学生たちはまさにこの3領域がしっかり結びつく実感を得たものと考えられる。ただおむつを着用し、排泄して、汚れたものを交換するというだけではなく、自分自身のこころとからだの変化を学生自身が体感したことがよくわかる。2年生は、体験後1年が経過しているにもかかわらずどの学生もよく覚えており、アンケートにもグループワークにも積極的に参加していた。図5.6の結果から、「おむつ体験」を内心では嫌だと思っても受け止め、体験することで、利用者理解が深まり、「こころが伝わるやさしい介護をしていきたい」との思いや、望ましい対応の理解につながったものと考えられる。

1年生は、まだ実習に出ていない段階での体験であったため、体験をとおして感じた感覚や思いと、授業での学びから、利用者理解と排泄介護を結びつけている。2年生は、訪問介護実習を含め、4度の実習体験があるため、より具体的な排泄時の介助方法や、声かけ、環境への配慮もふくめての思いを意見交換していたことがわかる。中でも、表1にある「紙おむつや紙パンツの柄や色を豊富に素敵なものにする」という意見に注目したい。実習で生活の中での排泄介助に関わるなかで、「紙おむつ・紙パンツ」を下着としてとらえ、自分たちが見えないところへのおしゃれをして楽しめないかと考えている。おむつを単に排泄処理の物品ではなく、色や柄を楽しめるようにして生活に潤いや楽しみを持ち、その人らしい生活を送ってほしいという学生の思いがよく出ていていると考える。自分自身の体験と実際の現場での利用者への対応が相まって、「排泄の介護」に対する思いが深まったことがうかがえる。

・まとめ

「排泄」は利用者が排泄の介助を受けるときの気持ちやこころの変化を感じ取ることにより、尊厳のある介助が出来るものである。今回の調査からは、プライバシーを守り、無理のない介助（無理がないというのは、利用者の心・体・そして、対応する介護者への遠慮などが含まれる）及び、利用者にとって羞恥心や不快感を出来るだけ取り除いた介助を行っていくうえで、「おむつ体験」は有意義な授業であることがわ

かった。

半日の体験ではあるが、おむつ体験をとおして、学生たちはさまざまな“思い”を持つに至った。「利用者本位」「利用者の思いに共感して」という言葉以上に、深く心と心が通じ合うケアに結びつく機会を多くの学生が得ていることがあきらかになった。

質問紙調査、レポート提出、グループワークなどに協力して下さった学生の皆様に感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 柴田範子、白井孝子、本名靖、綿祐二編著：「生活支援技術」、2009年、p.77～p.79、建帛社
- 2) 川延宗之編：「介護教育方法論」、2008年、弘文堂
- 3) 田中とも江監修：「おむつを減らす看護・介護」、2007年、医学芸術社
- 4) 西村かおる著：「ステップアップのための排泄ケア」、2009年、中央法規
- 5) 松尾壽子、八田勘司：「『おむつ体験』学習の検討」、2006年、第一福祉大学紀要
(平成23年10月31日受付、平成23年11月11日受理)